追手門学院大学文学部紀要　28号　1994年6月30日

世界の随筆　日本の随筆

――モンテーニュから俵万智まで――（下）

野谷　士

Essays in the World and Those in Japan

――from Montaigne to Machi Tawara――（Part II）

Akira NOTANI

（六）

essay という語の語源はラテン語の［重さを量る］（weigh）であり、また、［バランスを取る］（balance）でもある。つまり、あらゆる主題に関する、短いが気の利いた思索の軌跡なのである。随筆（essay）の読み手は一般の読者であって、論文（thesis）、論説（treatise）、あるいは学位論文（dissertation）が専門家向けであるのとは異なる。前章の終わりで述べたように、読者は語り手個人に興味、関心をもつことになるので、自然に腑に落ちるような語り口が、一層、親近感を強めることになる。そういう意味で、エッセイに最適の文体は、行雲流水的な自然体であると言えよう。その事を、最も簡潔、明快に言っているのは、兼好の『徒然草』一五七段である。

筆を取れば物書かれ、楽器を取れば音を立てんと思ふ。杯を取れば酒を思ひ、賽を取れば打たん事を思ふ。心は、必ず、事に触れて来たる。仮にも、不善の戯れをなすべからず。

出だしの［……物書かれ］の［れ］が［自発］の助動詞であることに注目すべきであろう。「自然と、何か書く様になり、……」と言っているところに妙味がある。

今一つの重要な随筆の特色は、同じく『徒然草』の五一段において的確な表現を得ている。

亀山殿の御池に大井川の水をまかせられんとて、大井の土民に仰せて、水車を作らせられけり。多くの銭を給ひて、数日に営み出だして、掛けたりけるに、大方廻らざりければ、とかく直しけれども、終に廻らで、いたづらに立てりけり。

さて、宇治の里人を召して、こしらへさせられければ、やすらかに給ひて参らせたりけるが、思ふやうに廻りて、水を汲み入るる事めでたかりけり。

よろずに、その道を知れる者は、やんごとなきものなり。

この結論は、一道、一芸に秀でたものの立派さを語り、価値あるものと認めてゐる。

さて、日本の随筆の場合は「自然さ」に重点があり、西洋の場合は、その果たし得る、「人生の指導者」、ヒント提供者的役割に重点があるという気がする。

なお、日本の場合、さらに「自然さ」について言うならば、情緒的な面での「自然さ」の妙味を発揮したのは、兼好よりも遥かに早い西暦紀元千年前後に「枕草子」を発表した清少納言であったと思う。「家居のつきずきしく、あらまほしきこそ、仮の宿りとは思へど、興あるものなれ。……」（『徒然草』十段）と、理屈を展開していった兼好に対して、清少納言は、

人の家につきづきしきもの　肘折りたる廊。円座。三尺の几帳。おほきやかなる童女。よきはしたもの。

侍の曹司。折敷。懸盤。中の盤。おはらき。衝立障子。かき板。装飾よくしたる餌袋。からかさ。棚厨子。提子。銚子。

（『枕草子』二三五段）

という調子で、情感豊富に、自分の好みに率直に、感覚的連想を流れるように展開してゆく。感性の良さという面に特に重点を置くならば、清少納言を日本随筆の元祖とする考え方も可能ではないかと私には思われる。

ヨーロッパ風、人生の生き方のヒントの提供、ということに重点を置いて考えてみた場合も、『徒然草』よりも百年以上早い、西暦一二一二年、鴨長明の『方丈記』が登場している。

知らず、生れ・死ぬる人、何方より来りて、何方へか去る。また知らず、仮の宿り、誰が為にか、心を悩まし、何によりてか、目を悦ばしむる。その主と晒と無常を争ふ様、言はば、朝顔の露に異らず。或は、露落ちて、花残れり。残るといへども、朝日に涸れぬ。或は、花しぼみて、露なほ消えず。消えずといへども、夕を待つことなし。

世に知られた「序章」の結論部である。無常感を廻る思索の網目は全編に展開され、含蓄に富む。

学生時代の漱石は、当時の指導教授であったDixonに『方丈記』の英訳を提出し、Dixonは漱石の英語力に感心し、その原稿を講演に利用した。漱石の格調高い英訳文も残って居るのであるが、私は兼好以前にも優れた随筆が日本で生まれていたという事実の好例と考えて良いと思う。マルチ人間的多方面性において、やや、兼好に軍配があがるだけだと思う。

（七）

マルチ人間的多方面性をもつ人物、言い代えれば、散文を自在に駆使して随筆を産みだしてゆく能力が、多方面の活動の自然の帰結として、ナチュラルに発揮されている人物達が、日本の歴史において、最も華麗に次々と登場したのは、何と言っても、明治という近代日本の文明開化途上の時期に於いて、であったと言えるであろう。

正岡子規と寺田寅彦を取り上げてみたい。子規（一八六七〔慶応三〕―一九〇二〔明治三五〕）はマルチ人間漱石の親友であり、まさに同年齢である。（二人の満年齢は明治の年数に一致する。）東大国文科を中退した子規は、政治家、哲学者、そして小説家にも、世が世なら野球選手にも（子規は日本で最初に野球をやった人達の仲間である）なりたいという夢を健康上の理由で断念し、俳人として生きることに専念しようとした。明治二二年、二二歳で喀血した子規は、「鳴いて血を吐く時鳥＝子規」と、号したわけである。

子規三大随筆の一、『仰臥漫録』の中のいくつもの俳句のグループが、その間の事情を象徴的に語る。

コホロギヤ物音絶エシ台所
サマザマノ虫鳴ク夜トナリニケリ
夜更ケテ米トグ音ヤキリギリス
痩臑ニ秋ノ蚊トマル憎キカナ

これを、もっと具体的に、詳しく、となると、やはり、散文でなくてはならない。『病牀六尺』の中のこんな文章を読まされると、胸が、きりきりと痛くなる迫力がある。

「……蕪村の句に

屋根低き宿うれしさよ冬籠

といふ句があるのを見ると、蕪村は吾々とちがふて肺の丈夫な人であったと想像せられる。この頃のやうにだんだん病勢が進んでくると、眼の前に少し大きな人が座って居ても非常に息苦しく感ずるので、客が来ても、なるべく眼の正面を避けて横の方に座って貰ふやうにする。そのほかラムプでも盆栽でも眼の正面一間位な間を遠ざけて置いて貰ふ。

……

余等の如きは普通の寝台の上に寝る事を許されぬからこまる。なぜ寝台が悪いかといふと寝台の幅の狭いのも一つの故障である。寝台は腰のところで尻が落ち込んで身動きの困難なのも一つの故障である。病気になるとつまらないことに苦まねばならぬ」。

（『病牀六尺』）

その他、俳句論、短歌論、そして人生論の優れたものがあるが、次のようなものは散文詩の絶唱というべきものであろう。

この頃の短夜とはいへど病ある身の寝られねば行灯の下の時計のみ眺めていと永きここちす。

午前一時、隣の赤子泣く。
午前二時、遠くに鶏聞ゆ。
午前三時、単行の汽缶車通る。
午前四時、紙を貼りたる壁の穴僅かにしらみて窓外の追込籠に鳥ちちと鳴く、やがて雀やがて烏。
午前五時、戸を開ける音水汲む音世の中はやうやうに音がちになる。
午前六時、靴の音茶碗の音子を叱る声拍手の声善の声悪の声千声万響遂に余の苦痛の声を埋め終る。

（『墨汁一滴』）

締めくくりの一行に、限りなく重い余韻がある。絶妙の切り上げである。

（八）

漱石を巡るもう一人のマルチ人間、寺田寅彦（明治一一年――昭和一〇年）について、考えてみたい。『吾輩は猫である』の寒月君であり、『三四郎』の野々宮さんである。五高で漱石に英語を習い、その紹介で子規に俳句を学んだ。俳人であると同時に、実験物理学者、東大物理学教授である。

この人の膨大な随筆作品については、私は、寺田寅彦独特の理路整然たるまとめ方に、彼の音楽のセンスが鮮やかに協力して居る二つを見れば十分と思う。（寒月君の音楽、ヴァイオリン愛好振りについては『我輩は猫である』中の記述が詳しい）一つは、子規の「仰臥漫録」論、今一つは「線香花火」、いずれも「備忘録」中のものである。

夏目先生の「修善寺日記」には生まれ返った喜びと同時にはるかな彼方（かなた）への憧憬が強く印せられていて、それはあの日記の中に珠玉のごとくちりばめられた俳句と漢詩の中に凝結している。子規の「仰臥漫録」には免れ難い死に当面したあの子規子の此方の世界に対する執着が生々しいリアルな姿で表現されている。そしてその表現の効果の最も強烈なものは毎日の三度の食事と間食との克明な記録である。「仰臥漫録」か

ら「ヌク飯」や「菓子パン」や「マグロノサシミ」やいろいろの、さも楽しみそうに並べしるしたごちそうを除去して考える事は不可能である。

「仰臥漫録」の中の日々の献立表は、この命がけで書き残された希有の美しい一大詩編の各章ごとに規則正しく繰り返されるリフレインでありトニカでなければならない。

線香花火

夏の夜に小庭の縁台で子供らのもてあそぶ線香花火にはおとなの自分にも強い誘惑を感じる。これによって自分の子供の時代の夢がよみがえって来る。今はこの世にない親しかった人々の記憶がよび返される。

はじめ先端に点火されてただかすかにくすぶっている間の沈黙が、これを見守る人々の心をまさにきたるべき現象の期待によって緊張させるにちょうど適当な時間だけ継続する。次には火薬の燃焼がはじまって小さな炎が牡丹の花弁のように放出され、その反動で全体は振り子のように揺動する。同時に灼熱された熔融会塊の球がだんだんに成長して行く。炎がやんで次ぎの火花のフェーズに移るまでの短い休止期（ポーズ）がまた名状し難い心持ちを与えるものである。火の球は、かすかな、ものの煮えたぎるような音を立てながら細かく震動している。それは今にもほとばしり出ようとする勢力（エネルギー）が内部に渦巻いている事を感じさせる。突然火花の放出が始まる。目に止まらぬ速度で発射される微細な火弾が、目に見えぬ空中の何物かに衝突して砕けでもするように、無数の光の矢束となって放散する。その中の一片はまたさらに砕けて第二の松葉第三第四の松葉を展開する。この火花の時間的ならびに空間的の分布が、あれよりもっと疎であってもあるいは密であってもいけないであろう。実に適当な歩調と配置で、しかも充分な変化をもって火花の音楽が進行する。この音楽のテンポはだんだんに早くなり、密度は増加し、同時に一つ一つの火花は短くなり、火の矢の先端は力弱くたれ曲がる。もはや爆裂するだけの勢力のない火弾が、空気の抵抗のためにその速度を失って、重力のために放物線を描いてたれ落ちるのである。荘重なラルゴで始まったのが、アンダンテ、アレグロ、を経て、プレスティシモになったと思うと、急激なデクレスセンドで、哀れに寂しいフィナーレに移って行く。私の母はこの最後のフェーズを「散り菊」と名づけていた。ほんとうに単弁の菊のしおれかかったような形である。「チリギクチリギク〳〵」こう言ってはやして聞かせた母の声を思い出すと、自分の故郷における幼時の記憶が鮮明によび返されるのである。あらゆる火花のエネルギーを吐き尽くした火球は、もろく力なくポトリと落ちる、そしてこの火花のソナタの一曲が終わるのである。あとに残されるものは淡くはかない夏の宵闇である。私はなんとなくチャイコフスキーのパセティックシンフォニーを思い出す。

実際この線香花火の一本の燃え方には、「序破急」があり「起承転結」があり、詩があり音楽がある。

漱石同様、見事な和魂洋才振りである。

線香花火に、まさに火がついてから消えるまで、数限り無く提示される陰影を、生き生きと描写するのに、Prestissimo（最も早く）とか、decrescendo（次第に弱く）とかの西洋音楽の用語を駆使し、締めくくりは、能楽・舞楽の「序破急」、そして、漢詩の「起承転結」をもって来て処理するあたり、まことに、心憎い。我々は、「散り菊」というネイミングに、日本の夏の風物詩と、それにまつわる、そこはかとなき郷愁とを、しみじみと感じないではおれないのである。

（九）

寺田寅彦の例を見ても、現代のマルチ人間は、自然科学と文学を総合し得る人間である場合、読者に対するインパクトが強いのではないか。

文明開化、言い変えれば、人類の物質文明を先導するものとしての科学、つまり形而下学（Physical sciences）の限界を我々は発見し始めており、いまさらながら、精神を扱う、哲学、文学等の形而上の学問（metaphysics）を見直し始めているからである。

藤原正彦の随筆の魅力は、世界的水準の数学者としての研究姿勢と、その思索の深さから来るのは言う迄もないが、作家新田次郎、藤原てい夫妻の次男という、俗に言う毛並みの良さからも来ていることは間違いない。随筆の場合、作者の育ち・経験を総合した、人間としての魅力が、その文章へと読者を引き付けるということはごく自然な事であるからだ。

藤原一家の経験は日本民族の経験でもあった――凄まじい敗戦という経験であった。二度と繰り返さぬためにも、しっかり次の世代に語り伝えておかねばならぬ経験なのである。

藤原正彦については、藤原ていから始めねばならない。

昭和二四年、日比谷出版社から出版され、たちまち、大ベストセラーとなった『流れる星は生きている』について、藤原ていは、こう言っている。

彼はわたしが引き上げてから、約三カ月遅れて、北満の延吉という場所から引揚げて来ていた。丸一年間の捕虜生活がどれほど惨めであったか、およその想像は付くけれども、彼はめったにその話をしない。ただ再び、この平和な時代になっても、その国を訪れようとしないところを見ても、その傷はどれほど深かったことか。彼（新田次郎）は今、小説を書いているが、自分の引き上げの記録らしいものはたった一度書いただけ。彼のおびただしい作品の中には、その片鱗さえも書き込まれてはいない。

いつの間にか、私共夫婦の間には、「引き上げの話」は、禁

句になってしまっていた。

当時五歳だった長男も、今は三十五歳。大学で機械工学を勉強して、自動車メーカーに勤めている。一児の父にもなった。その彼が、引揚げの話に触れると、黙って席を立ってしまう。五歳の心に、あの苦しみは、それほど鮮烈に焼き付いているのかと思うと、あわれにも思う。

「お母さん、ボクはおなか一杯なんだよ、だから、このおいも、赤ちゃんに上げて……」

三日食べない空腹をかかえて、彼はそんなことを言って、わたしを助けてくれた。多分、五歳の知恵の全力だったのだろう。だから、私は心して、彼の前で、引揚げの話には触れないことにしている。

当時二歳だった次男は、アメリカの大学で、三年間、数学を教えていたが昨年帰国し、今は日本の大学で教鞭をとっている。この次男（正彦）は、あまりに当時幼なすぎて、引き揚げの苦しみは全く記憶にないと、私は考えつづけて来た。その彼が、

「ボクはどうして川がこわいのだろうか、日本でも、アメリカにゐたときも、どんなに小さな川でも、一応は立ち止って、考えてから渡るような習慣を持っているのだが……」

つい先頃の話である。私は、彼の顔をまじまじと眺めた。

「やはり、そうだったのか……」

朝鮮の平野を流れる河を渡る時、胸までつかる水をかきわけながら、彼を落すまいと、私は、横だきにした手に力を入れた。彼は恐怖のためにヒーヒーと泣いた。

「泣くのじゃない」

わたしはかなりきつい言葉で彼を制した。

その時のおそろしさが、今、彼の潜在意識として残っているのだろうか。

彼は、堂々と、対等な立場で、何の偏見もなく、アメリカの生活を楽しんで帰って来た。

何物にもおじず、世界は自分たちのためにあるくらいに考えていると思っていたのに、やはり引き揚げの記憶は身体の中に残っているらしかった。

当時、生まれて間もなかった娘も、三十歳になった。大学で文学を勉強していたので、小説でも書き出すのかと思っていたら、自分で結婚の道を選んだ。既に二児の母になっている。

「好き嫌いをしてはいけません、ママたちの小さい時は……」

などと、子供たちを叱りつけている。彼女は、引揚げの苦しみを全く知らないので、私の書くものも、話も、素直に耳に入ってゆくのだろう。

「私は、お母さんのような苦しみに耐えられるかしら」などと、母親としての立場で、私と比較しながら、生きている様子である。

（『流れる星は生きている』昭和五一年）

中央公論社文庫版の「あとがき」より）

では、正彦氏のオブセッションとなってしまっている川の体験とはどういうものであったか。『流れる星は生きている』そのものを読んでみよう。

石ころ道をあえぎあえぎ上り詰めた峠から見下ろす眼下には、幾条かの銀色に輝く川の流れが進路を直角にさえぎっていた。

「あッ、川が！」

けれども恐ろしいものに突き当るまでには半日も掛った。峠を下って、正彦が牛車から降されて、一家四人が立ちつくしている前には広い川が行手をさえぎっていた。先に行く人の渡るのをじっと見ていると一番深い処が私の胸ぐらいであった。中心近くは水の流れがはげしくて、渡ってゆく人の姿勢が高くなり急に低くなったりする。私はまず咲子を背負ったまま渡って向こう岸に下ろすと、すぐ引き返して正彦を抱いて川に入った。私の疲れきった腕にはそう長くは正彦をささえられない。何度か水の中に正彦をつけた。水の中に入れると正彦はずっと軽かった。正彦は水の中を引きずって行かれる恐怖のために、

「ひいっ！　ひいっ！」

と泣いて私にしがみつこうともがいた。

「泣くと川の中へ捨てちゃうぞ！」

私は正彦の体を後ろからはがいじめにしてやっと難所を渡った。後ろにはまだ正広がいる。私は正広を渡すだけの力がない。私は自分の身体を投げ出すように川原にひっくり返って憎らしいほど澄んでいる空に向ってはげしく息をしていた。

藤原ていは、このようにして、五歳、二歳、ゼロ歳の三人の子供を抱え、引きずりながら、借金をし、物乞いをし、食べ物を拾いつつ、ひたすら歩いて、やっと乗れた引揚げ船では、子供が泣く、おしめの匂いが狭い船室にこもる、と、皆に苦情を言われながら、耐えに耐えて、遂に三人の子供達を無事、祖国に連れ帰っている。藤原正彦が母から受け継いだものは、何といっても、この強烈な生きる意欲であり、根性であり、ありとあらゆる問題に果敢に挑んで行く、タフなチャレンジ精神であったと私は思う。

ていねいな観察と正確な理解力とは父親新田次郎譲りなのだと思うが、『若き数学者のアメリカ』の中の次のような一節は、彼の負けず嫌いがアメリカ文化と格闘した結果生まれた、優れた比較文化論になっていると思う。

アメリカの学校では、知識を詰め込むことよりも、「いかに他人と協調して仕事を進めるか」とか「いかに自分の意思を論理的に表明するか」とか「問題に当面したとき、どう考え、どう対処して行くか」とか「議論において問題点をどう堀り出し、展開するか」などといった基本的なことに教育の重点を置いてるらしい。そのせいか、地図上で日本をフィリピンと間違える

ようなハイティーンの小娘でも、議論になると滅法強い。考えが極めてしっかりと練れており、言い表し方も論理的であるし、そのうえ、相手の弱点をつくのが巧い。

……

とにかく、この連中と口論になって相手を黙らせたことは一度もない。

……

知識に関する試験をしたらアメリカ人が劣等に見えるだろうし、話し合いになったら日本人はまるで太刀打ちできないだろう。

……

一つだけ感ずることは、知識というものは、必要になれば学校で教わらなくとも自然に身についてくるものであるのに反し、論理的な思考方法とか表現方法は、若い時に身につけないと後になってはなかなかむずかしいということだ。

イギリスへ行って、ケンブリジで本式に数学の研究をしても、彼のこのチャレンジの姿勢は変わらない。子供が小学校で「いじめ」に会う問題も、積極的に解決策を考え出して行くのであるが、的確に「違いが分かる」藤原正彦は、やはり、尊重すべき思索の軌跡を提供してくれていると思う。（以下、『遥かなるケンブリジ――一数学者のイギリス――』より、二箇所、引用する）

座ったままねずみ色の空を見上げながら、ある作家が、

「小説を書くには、広くて明るい部屋より、狭くて陰気な方がよい」

と言ったのを思い出した。なるほど、イギリスが作家の質と量、読者層の厚さなど、世界に冠たる文学国であるのは、この、世界で最も陰気な天候のせいだ、と合点した。四季を通して温暖な地の、陽光降り注ぐ豪華な部屋で、人間の根源的悲哀についてひたすら想にふける、などというのはすこぶるストイックでマゾヒスティックで不健康である。陽光により分泌されるホルモンは、少なくともそういった作業を阻害する。

文学だけでなく科学でも然りだろう。イギリスはとびきりの科学国でもある。ニュートン、ダーウィン、ファラデー、マクスウェル、ラザフォード、ディラックなど、歴史的巨人の名を挙げなくとも良い。日本のある調査機関が、第二次大戦後の科学上の百大発明発見を調べたところ、その半数以上がイギリス人によりなされたという。主要な科学原理の半数が、人口六千万足らずの国で生まれた、というのは異常なことである。これも、陰気というより、陰惨な天候によるところ大ではないか。気持を外へ向けるホルモンさえ出なければ、研究に長期間専念することはたやすい。私は窓の外の雨空を眺めながら、この天候は大きな味方だ、と一方的に思った。

イギリス人は何もかも見てしまった人々である。かつて来た道を、また歩こうとは思わない。

食料や衣料への出費は切り詰めているが、精神的余裕の中に、静かな喜びを見出している。不便な田舎の家の裏庭で、樹木や草花の小さな変化に大自然を感じ、屋根裏を引っかき回して探し出した、曾祖父の用いた家具に歴史を感じながら、自分を大切にした日々を送っている。もちろん悲しみや淋しさを胸一杯に抱えてはいるが、人前ではそれをユーモアで笑い飛ばす。シェイクスピアの「片目に喜び、片目に涙」である。

彼らの精神的ふくよかさは、イギリス病とか斜陽といった、経済指標によった名称からは、想像できないものである。日本は、イギリスのいつか歩いた道を歩んでいる。イギリスは、日本のいつか歩むであろう道を歩んでいる。それは、ずっと以前に、日本人が歩いていた道にも似ている。

日本人とイギリス人とは、心底に無常感を抱いているという点で、本質的によく似ている。日本とアメリカは、緊密な交流を保ちながらも、なかなか真の相互理解に達し得ないでいる。それに比べ、日英が、深い部分で心を通わせるのは、はるかに容易と思われる。

（十）

モンテーニュ、寺田寅彦、藤原正彦のように理路整然たる思索の軌跡を我々に提供して、人生を考える妙味を我々に教えてくれる文人も居れば、軽やかに、感覚的に、そこはかとなき人生の陰影を感じ取らせてくれる人、つまり人生模様の、デッサンの楽しさを教えてくれる文人もある。誠に、随筆の提供者は多種多様である。

そのさい、脱女性的理性派は、曽野綾子であり、萩野アンナである。それに対し、女性らしい感受性をフルに発揮するのは岡部伊都子であり、幸田　文であると言えよう。そうかと思えば、マルチ人間的に多彩な才能を示し、橋本　治、さくらももこ、のように挿絵と文章を駆使して、活字メディア、絵画メディア両用で我々を楽しませてくれる文人もある。

漫画家の文章も軽視出来ない。大正時代、既に、岡本一平の漫画漫文が漱石に賞賛されて居る。ここでは、さくらももこ、『ものかんずめ』より、「奇跡の水虫治療」を紹介しておく。

どうせこんな療法は、我が清水市の茶所ならではの迷信だろうと思い、たいした期待もせずに一夜は過ぎた。

ところが、一週間この方法を続けただけで私の水虫は完治した。

どれほど狂喜したことか。これで私の人生も、やっと普通の幸せを求める権利が与えられたのだ。

それを見てあわてたのは姉である。姉は早速私の行為とその成果を医者に告げ口した。医者は「そんなバカな。アナタ、いくら此処がお茶所だからって、そのような話は聞いたことが無い」と一笑に付したそうだ。

しかし、お茶パワーをリアルタイムで目撃した姉は、もはや密教のパワーを見せつけられた信者に等しい。

彼女も毎晩お茶っ葉を足に巻いて眠った。布団にはお茶の汁の跡が転々と染み付き、水虫治療の悲しさを物語っていた。

数日後、姉の水虫も完治した。驚異である。私だけではなく、姉まで治ったとなると、もうまぐれではない。

医者も水虫軟膏も、思いがけない伏兵の登場に敗れ去り、闇に葬られた。

それにしても、このお茶っ葉療法を、初めて実践したのは誰なのだろう。また彼は、どんなシチュエーションで水虫にお茶っ葉をあてがおうと思ったのか。

何はともあれ、いにしえの水虫研究家に金一封でも送りたい。

アニメの「ちびまるこちゃん」同様、自然体の妙味である。せっせと言葉でマンガを描いてゐる趣がある。

現代は確かにマルチ・タレントの活躍する時代、「道を知るはやんごとなし」ということの「道」が複数であって、それが自信を倍増、三杯増させることになる場合は大いに結構である。その意味で私がエッセイストとしての成長を期待して居るのは歌人俳万智である。

（十一）

歌人西行といい、俳人芭蕉といい、短詩型文学を深く極めようとする人は、いずれも旅する人である。いずれが原因とも結果とも判定し難いが、良い旅行記が生み出される。

俳万智にも良い旅行随筆がある。宮沢賢治の跡を訪ねたものが特に良い。詩的感興に、共鳴するものが有るからだろう。

記念館からさらに南西の方角へ足を運ぶと北上川が流れている。朝日橋から花巻大橋へ向かうあたりの岸辺を、賢治は「イギリス海岸」と名づけた。そこに立ってみると、なるほどと思う。ゆらゆらと不思議なカーブを描いた岸辺に、さざ波のように川の水が寄せてくるのだ。イギリスに行ったことなど無くても、世界地図のあのイギリスの海岸線を思い浮かべてみると、自分がそこにいるような気持ちになってくる。

賢治が名づけなかったら、誰もそんな事は思わなかったかもしれない。「イギリス海岸」――なんてすてきな響きを持つ言葉だろう。

真似をしてみるのもいいな、と思う。旅先で出会った風景、印象に残った場所に、自分だけの名前をつけてみるのだ。

「風を待つバス停」

「ヒマワリ道路」

「ひなたぼっこの河原」
考えるだけでも楽しいし、記念のスナップ写真の裏側に、そっと書きとめておくのもいい。

水底に貝の化石がつぶやいて
　イギリス海岸静かに光る

黒板の文字なつかしき昼下がり
　「下ノ畑ニ居リマス　賢治」

（『ふるさとの風の中には　――詩人の風景を歩く――』）

人生の旅の中には、時間から時間への旅、言い換えれば、春夏秋冬の中の旅も有るようだ。其の際の季節感くらい、人生の情緒的側面を豊かにしてくれるものは無いだろう。彼女の『旬のスケッチブック』は、季節季節の果物や野菜を、文字通り、言葉でスケッチするものであるが、「七月――トマト」の章など、軽やかな人生論としても人間論としても、好個のエッセイになっていると思う。

……たしかに、私にはトマトの歌が多い。
桜の花は、多くの歌人に歌を詠ませたことによって、日本の花の王様になったと言われている。するとトマトは、私にとって、野菜の王様、と言う訳だ。

　陽の中に君とわけあうはつなつの
　　トマト確かな薄皮を持つ

これはちょうど六年前の七月に作った歌で、明るい情景の中で暗い事を考えてしまったのを、はつなつのトマトにかこつけて、詠んだ一首。

スライスして、かぶっと食べるぶんには気にならない薄皮も、シチューなどに入れるとしっかり残って、その存在に改めて気づく。そんな薄皮のような見えない皮膜で、お互いの心も、もしかしたら、覆われているのかもしれない――。今、分けあっているトマトにも、確かな薄皮があるっていうことを、なぜか私は考えてしまった……。

ちなみに、トマトの薄皮をうまく取るためには、ご存知「湯むき」という方法が有る。「食道楽」の著者村井弦斎に「料理心得の歌」というのが有って、その中では、

　赤茄子を刃物剝くな湯をかけて
　　手で薄皮を取るものぞかし

と詠まれている。ハートの薄皮も、高温の情熱をくぐりぬけてはじめて、やさしくつるんと剝かれるものかもしれない。

　庭に出て朝のトマトをもぎおれば
　　ここはつくづくふるさとである

（一九九四・四・七）